

→「恋しくば、訪ね来てみよ…」と谷崎潤一郎の母恋い

2019.6.9(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第546回 参加報告

葛の葉狐に扮した猿が、右顧左眄(うこさべん)の身ぶりで「あちらを見ても山ばかり。こちらを見てもやまばかり。……平野の中に横たはっている丘陵の信太山。」(折口「信太妻の話」より)。JR阪和線で下ると、「山ばかり」という風景はもちろんなく、「平野の中に横たわっている丘陵」の様子はそれとなくうかがえました。そして、谷崎がここまで取材にきたという痕跡はありませんが、確かに『吉野葛』は信太山に伝わる「葛の葉伝説」(「信太妻」)に材をとった作品だと思いました。

作品の語り手の私(谷崎潤一郎)は、大和吉野へ、友人で案内役の津村(妹尾健太郎)とともに後南朝を題材にした歴史小説を書くために出掛けます。結局、「妹背婦女庭訓」「義経千本桜」「狐喰(こんかい)」そし「蘆屋道満大内鑑」、説教節の「葛の葉」へと興味が移り、津村の「母恋い」と私自身の「母恋い」が共鳴し合っていきます。『吉野葛』は随筆風に仕上げられた作品ですが、谷崎自身の母・関さんは、谷崎が31歳の時に亡くなったそうです。浮世絵師・月岡芳年からモデルを頼まれるほどに美しい人だったそうで、それも、母の愛を受けていた時代は、谷崎の家庭も裕福で、余計にその母が亡くなった時は、不自由のなかった

家庭生活もオーバーラップして母の美しかった姿を増幅させていたのではないかと思われます。その「母恋い」の主題は、大正8年発表の『母を恋うる記』に始まり、この『吉野葛』(昭和6年)、『蘆刈』(昭和7年)、『少将滋幹の母』(昭和24年)、『夢の浮橋』(昭和34年)などに繰り返し書かれているそうです。

聖神社からは勾配のきつい坂を下り、小栗街道(熊野古道)に出ましたが「この坂を行きがけに上るのは大変だ、行程にも気を配って下さっているのだ」と係の人

達の気遣いを感じました。小栗街道に面した聖神社一の鳥居から北側は街道風情が残っていて、南側は道幅も広く、新しく整備された道のように。一の鳥居からすぐの路地の奥に「篠田王子跡」がありました。防犯ブザーがけたたましく鳴り響く路地に吃驚しましたが、奥の空き地に小さな社がありました。さらに南へ、八坂神社の向かいに小栗判官の傘掛松と照手姫の腰掛石があるのですが、小栗判官と照手姫は熊野湯の峰温泉の「つぼ湯」で再会したのでは？ 信太山の駅はここから20分程だそうです。私には珍しい遊里街を抜けて、その駅へ向かいました。

<報告：岩井よおこ>



聖神社へ



聖神社一の鳥居